

ESSAY いたずら

倉元 信行

5

二人の作家

正確に言うと彼は作家ではなく医師ということになるのだろうが、「ベシャワールにて」という本の鋭い筆致と内容に出会った時、私は彼に立派な作家という称号を冠した。

福岡高校の同級生である中村哲君は、パキスタンやアフガニスタンの辺境で医療活動に取り組んでいる医師である。

10年ほど前のこの最初の一冊で、彼は、自分がこの地で医療活動に携わるようになったきっかけや、らい病との戦い、というより人や組織や風習との戦い、そして民族や宗教について明快に論じている。美しい自然の描写も折り込んで。

国連のような組織から派遣された医療団がいかにお役所的で、現地で力を発揮できないかというようなことも良く分かる。

私はこの本の本質が、文明人であると思っ
ている人間たちの奢りに対する激しい怒りであると読んだ。「トウキョウを撃て」という章などは今読んでも実に新鮮であり、現在の日本に対する鋭い警鐘として通用する。

彼の講演会には何度か行ったが、いつも淡々と飾り気なく、だが力強く語る彼の言葉は、多くの人に感銘を与えている。

テレビに出ても全く普段と変わらず、控えめすぎるくらい

の彼の言葉に、“ベシャワール会”のことをもう少し宣伝すればいいのに、と思っている人もいるかもしれない。

しかしこれが彼の持ち味なのだ。

「金を払うのはいつもクラスで一番遅かったね」講演会の後、私が会計をしていた時のくだらない昔話をすると苦笑いしていたが、全く無口な男というのが当時のクラス全員の印象だったと思う。

筆運びのうまさ、母上が火野葦平の妹であるという血筋と関係するのであろうか。

もう一人は原孝君といって、同じく高校の同級生である。

「原君のうちは芸術一家よ」と伯母が言っていたのを覚えている。

彼の家は私たちが住んでいた鳥栖(とす)市内の借家のすぐそばにあった。

美少年という言葉が全くぴったりの彼が、講堂の片隅で一人もの悲しいサクスの音色を奏でたりするのだから、女生徒が騒がないほうがおかしいだろう。

しかし彼の方は女の子にも勉強にも、いや高校生活そのものに全く関心が無いといった風情だった。

九大の文学部に入っところからはピアノを始めたようで、卒業後は東京でジャズピアノストをしているという噂を聞いていた。

図書館の返却棚というのは時々面白い本を発見できるので覗くことがある。藤沢市の図書館の返却棚でたまたま手に取った本が彼のものだった。

そして彼が原 泉(りょう)という直木賞作家であると初めて知ったのである。

作家に転向して二作目の「私が殺した少女」という題のハードボイルドが受賞作であっ

た。私はうかつにもそれまで全く気づいていなかった。

緻密な描写でリアリティにあふれ、大胆な筋立ての作品はことごとく批評家と読者の高い評価を受けるのだが、何しろ寡作なのでファンはやきもきしている。

大作もいいが、私は彼が一冊出している短編が好きで、そちらのほうにも力を入れて欲しいのだが。

